

# 東シナ海の雲

宮之浦岳・開聞岳登頂記

その4 来生博子

## 悠久の清流で遊ぶ。

第4日目 5月2日(日) 晴れ

起床5:00・出発6:20～清流6:45・出発7:00～(ヤクスギランドへ3.9km)～大和杉7:20(ヤクスギランドへ2.9km)  
～三根杉8:40～(ヤクスギランドへ1.3km)～苔の橋～荒川橋8:45～林泉橋～屋久杉ランド入口9:08  
バス乗車9:35→安房かもめ荘(荷物回収)→焼酎川→千尋滝入り口→尾之間温泉11:15  
…入浴・昼食・食堂大門12:00…  
バス迎車14:00→安房14:25→屋久島空港14:46  
JAC076便16:34発→鹿児島空港着17:08→池田湖19:00→ひらきき荘19:20

- CL アルコール隆徳(52) ・昨夕のBPでのビールは最高でした。巨木、巨木の中の生活は良かった。とにかく無事(なにごともなく)終えて御苦労さまでした。\*BP 田 ビバーク・プラッツ(緊急宿泊場)
- 会計・記録1 ウルル歌子(55) ・全行程を歩く事ができたので良かった。
- SL・記録2 公爵元男(62) ・歩いて歩いて屋久杉と大木の原生林で奥深い山の雰囲気十分にたることができた。
- 装備・記録3 シカハ勝己(31) ・原生林の雰囲気が心に浸みました。
- 食料・記録4 日の出の博子(50) ・澄み渡る流れ、生き生きとした多くの花、ゆったりさを感じる町や人々…台風の道でも住みたい。
- 食料・記録5 カルオン依代(52) ・みんなの御蔭で屋久杉ランドまで全コース歩いて本当に良かった。バンザイ!!
- 医療・ 縄文杉八千代(61) ・良かった。長いコースを歩き通した。
- 山行計画・ ビックル秀子(50) ・すべて良かった。猿がおもしろい。屋久島山行天気の良いまま終って嬉しい。

~~~~~

今日のために距離を稼いだ昨日の長い歩きは心地よい疲れだった。深い森の長老を混じえた大家族に優しく包み込まれる様な原生林の中で夕餉をし、語らい、思い思いの時を過ごせた。隣のテントでは、「ビールが足りない。」と言っていたCLは諦めて寝たようだし、並びのテントで「さあ、歌おうよ。」とはじめたのに、どうやら私一人が大声で歌い狂ったようだった。一番若い山本は、食後「絵を描きに行く。」と言って森に消え、肌寒くなって皆がテントに入ってもヘッドランプを照らしながら、写生した5枚の葉書に色付けをし、友人や祖父宛てに、絵手紙を完成させていたとは、なあんて有意義で高尚な時を過ごしたのでしょう。あとで拝見したが、ほのぼのと趣のある永田岳・宮之浦岳・縄文杉…などいい絵はがきになっていた。隠れた才能や技量を小出しする静かな山本である。

状況の全ては、私に一番効率のよい眠りをもたらした。すっきりと目覚めたのは2時半であった。テントから出る。静かだ。遠くの灯りさえも無く、寝る前に啼いていたアオバズクの声すらも無く揺るぎのない静寂に浸るとはこの事、島最後の朝は島中の小鳥たちより早く目覚めた。無言で美味しい森の空気を深呼吸し、森もみんなもそのまま、そのまま。そっとシュラフに戻るが、30分ごとに時計を見てしまう。



岩登りの  
メッカ

尾間温泉  
より望む

本富岳の  
人面岩

日の出の博子の  
屋久島絵日記  
5/2長い下り  
だった

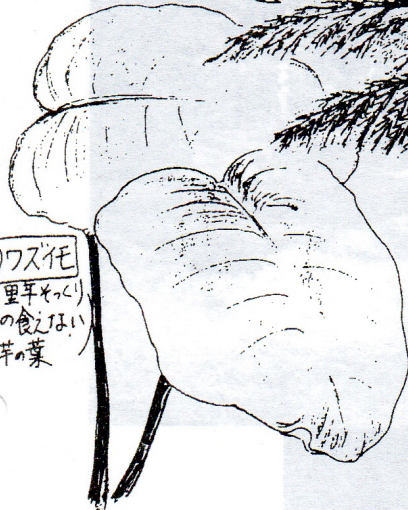
エンジェルズ  
トランペット

道端のヤブに  
ワサワサと咲い  
ている

ここでは雑草なんだから!



ハイビスカス



ワスレ  
里芋(いり)  
の食い  
羊の葉



ヘゴ

木生シダ。茎は  
くりぬいて鉢に  
される。始祖母  
がどこからか  
甌んでこぞうは  
太古の世界を  
思わせる人の  
背丈以上の大  
ささにびっくり!



さる「ヨ、乗けてよ」

人「ど、どこまでかな?」

さる「先の奴が降りる所  
までさ」

人「いいけど  
危ないよあ」

さる「平気さ!  
いつもの  
ことよ。」

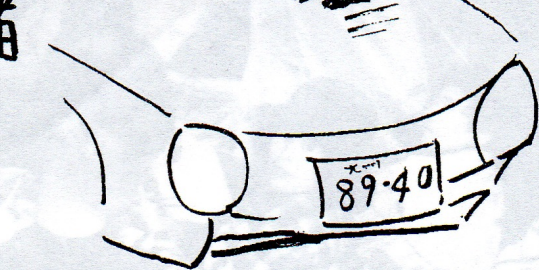
南国情緒  
いっぱい

ひらきさ荘の  
お2人です

接客担当は  
歌好き話  
好きの  
ヨ子さん  
カピス良すぎ  
て宿主にお  
られる



87オセほ  
とても思えない  
しかり者の  
宿主は 経理担当



2台の車にひきさう乗った  
ヤクザル...これは「厄猿」か。



下山した我々の  
喉を潤してくれた  
マクビワとタンカン





(上) 翁岳をバックに  
 (中) 花之江河  
 は日本最南  
 の高層湿原  
 (下) 安房歩道  
 のキャンプ。

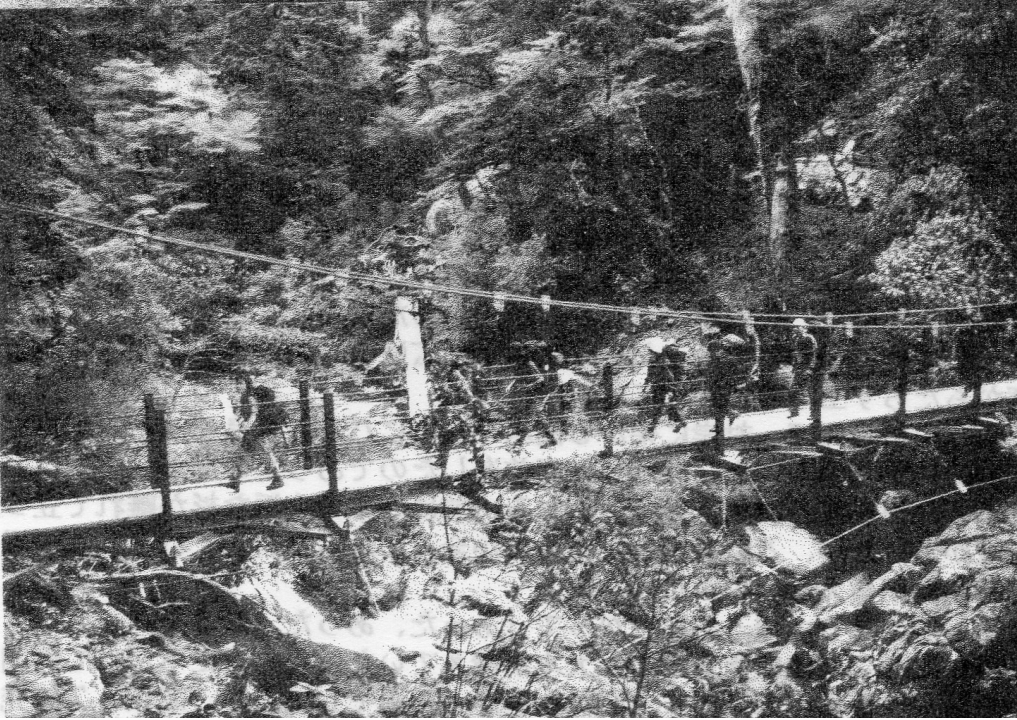
香鼓吹響の共  
作振多岡高  
濃赤式にまじ  
のびーれて大  
のみ式作ハ食  
コ随命前、濃



コ末届の丹大作は驚コ昔、ひは六謝  
き木成の跡、ひあまてごもの村  
天崩一な人  
谷白、日  
びとゴの用るごる  
音木作  
ちふる  
大ジごろ、コが、コが、>聞き  
とよJテ川が  
…る依作子、  
の日の雨”、お死  
>式謝余き  
の山

(上)(中) 荒川の清冽な  
流水  
(下) ヤクスキランドに  
つた

間大のち便  
押飯の示  
カI枝  
の‘  
式ま  
コ  
の





5時、いつものテント山行とは違い、のんびりとしたCLの起床の声掛けと共に皆が起きだす。とたんに加藤の元気な声も起きると、いつもの1日の始まる予感。加藤は高岡を連れて雪隠をつくりに赴き、来生と河合は朝食のしたくに取り掛かる。夕べ残ってしまった赤飯も混ぜて、スープの素で雑炊にする。重いからデザート用に少なめに持ってきたフルーツのりんごは割ってがっかり。芯の周りが傷んではいたが、良いところは8人でも食べれたものだ。荷物が減ってきて、新鮮物にも遠退き山を下りる事が近くなると、出発の際、宿命的に荷物減らしに勤しみ不十分である事など、なんとも思わなかった事が、それは大変に我慢していた事に気付く、ビールや夏みかんの1個や2個、この程度の山に持ってこれたはずだ、惜しい事したなど後悔の念に駆られるのは私だけではないでしょう。

朝靄がうっすらと谷から沸き上がってきた。小鳥の鳴き声に朝餉の香り、しっとり朝靄にかすむ古木立ちのたたずまいは幽玄な舞台の完成。少し冷え込んだ10℃の朝は熱いココアを3杯も美味しく飲めた。

汲み貯めた搾り水で互いに、歯磨きや顔を洗った後はキャンプの痕跡も雪隠もすっかり片付け、足取りも軽く小コルを去る。木々の間に輝く残月はまんまるく、7時に近い時間でまだ明るく太陽かと勘違いをした。鬱蒼とした森は植生が変わって来た。樅・栂の見事な大木は横たわり、蒼苔に覆われ次代の温床になっている。それはまるで、子育てに身をやつしている母体のもようでもあり、数種の幼木を生やした有様は寄せ植えの鉢のもようでもあった。大岩を抱え込んだ大木あり、大人が一抱えに余るヒメシャラの巨木あり見応えの、薄暗い苔の森道は所々滑りやすい。出発の日、白谷雲水峽で見送ってくれたタクシーの運転手が言ったとおり、確かに、つるつる肌のヒメシャラはどれも寄生木を付けたものはない。

軽い登りの後はぐっと右に折れ水音がかすかに聞き取れる。CLは「地図どおりだ。」と大根田と確認しあっていた。ぬかるみぎみの小下降すると程なくCLの「わあ、いいよー」の歓声を聞く。「なに、なに。どうした。」と後に続く者どもは急ぎ足、そしてCLと同じく「わあ！」なんて綺麗な川でしょうか。

悠久、幽玄、神秘、明媚、それから…オアシス！！！！

幅5m程のナメラの沢は、“雨の日の増水時は危険”との看板が立てられている。ここが渡れなければ山の中で足止めを余儀なくされる所。河床の岩盤の隙間の流れは浅そうで深く河岸の丸み掛かった岩は気をつけないと苔で滑りかねない。しかし今日、眼前を横切る清流の河床は澄み渡り、両岸に青葉枝垂れ、木漏れる朝日。この梅雨時に、山行中好天が続く屋久島最後の日に島のこんなに素敵大自然を目の前に受けて、存分に遊びたい遊び心が疼く。まずはCLが写真を撮るため皆にいろいろ注文つける。その後はみなザックを放る様に置き、川を溯ったり倒木に乗ってみたり。澄み渡る流れに魚影はないが、砂粒一つ隠さずの静かな流れは水の在ることを忘れるよう。トラバースの位置から15m程下ると、10畳が2間ぐらいのまったいらな岩に表面張力のような流れの、まるで、“潤いの間”とでも言いましょうか、「川」だから仕方なくその摂理に従っているだけのような静かな動きの大広間が展開していた。登山靴のビムラムが濡れるだけだ。

CLが中央の深いクラックを跨ぎ両手を広げて‘大の字’になって見せると、足元の透明度がもたらす上下の線対称になった。

名残を惜しんで、対岸に架かる倒木を慎重にバランス良く渡る。本日の行程は、9対1で圧倒的に下りが多いと、はりきって前進したのであったのだが…。

小さな沢を渡り次第に登り道となる。前に3本の立派な杉が離れて立つ所に‘大和杉’の看板があったが、どれを指しているのか全くわからない。これら3本の屋久杉も凄いがまだ固有名詞が貰えないのかしらん？

CLが、30m程一気に下がって「あった、あった。ここだ。」

確かにそこには威風堂々の巨大木が構えていた。こんなに下がって周囲に高さを誇らずにいたから、落雷にも遇わず、発見も遅かったのでしょうか。昭和47年発見はまだ新しいの



だそう。縄文杉に続き、2番めの巨木は天に向かい真っすぐで一番、杉らしい樹形を成していた。

登り帰して看板から左方を更に登る。やがて急に下りながらの右カーブに、虎の衣を借る狐よろしく、可愛らしいヒカゲツツジが常緑の古木に着生し花を添えていた。灌木の繁茂する森がしばらく続くと、朝日も眩しい尾根に出る。木立はあるのであまり展望はなかったが時折、宮之浦岳を振り返ることができ、アセビの輝く白花を頬に受けたり、見上げたりしながら2つの小ピークを越えると‘屋久杉ランドへ2.9km’の案内があった。

それは大和杉からまだ1kmしか進んでいない事？ うっそー、たった1km？さんざ歩いたのにそれはないよ。間違っていないの？と思う程の長い距離だったのだが如何に？しかし、この上ない清涼で美味しい空気と若葉の緑に、すっかり五臓六腑を清められて2時間のうちにもたらされた新たなる空腹は、なんでも食い尽くしそうな勢いだ。大休止をとる。今夜は宿泊り、食料はもう残さなくても、明日は明日。なんとかなるで、食べちゃお。喉も乾いたし水だってもう、加減する事もないさ。と水筒の水を飲み干してしまった。

昼着の計画を大幅に短縮でき、屋久杉ランドへ9:30分には到着しそうということで、加藤が迎えの‘まつばんだ交通’に携帯電話で連絡とるが、全て出払っているという。このシーズンに無理もないことだ。変更したのは我々で、こうなる事を申し出ている訳ではないのだから。それでも、小型2台かバスなら回転できそう、しかも料金は変わらないとのやりとりが交わされ、予定より早いが出来てもらえるのを確認し、安心して下山を続ける。

根元が3つに分かれた三根杉から、‘屋久島ランドへ1.3km’の案内を見届けると、太忠岳分岐に出会う。一つめの吊橋に出会った。高度のある気持ちのよい溪流の懸け橋だ。もう、ここは屋久島ランドのはずれに差し掛かったと思われた。右に堰止湖をみたり、吊橋を3つ渡るころには、とても山歩きとは思えない軽装の人々に出会う。ランド内は広く、散策コースが縦横無尽に延びており、ぐるぐる巡りで、もう歩きたくなあい！となってしまうそうだった？。

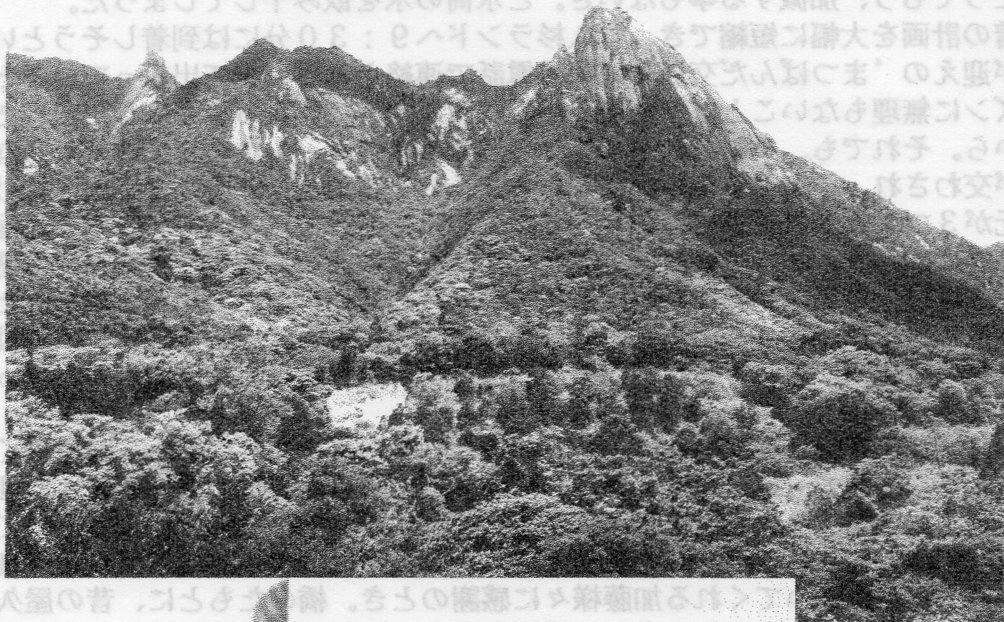
‘入り口へ0.8km’の案内を見て、まだ新しい荒川橋を渡りきると、階段でぐっと下に降りる道と平らに前方へ延びる道とが、実距離以上に歩いた感覚の身体をまよわせる。すかさず加藤が、たっただと階段を駆け下り偵察に走った。下は駐車場になっていて、どうやら上と続いているらしい。ランドの地図の持ち合わせがなくて、道はすばらしく良くてわかりづらい。身軽に動いてくれる加藤様々に感謝のとき。橋のもとに、昔の屋久杉の伐採方法や試し切りの様子が書かれた大きな絵看板を見る。出口（入り口）はもう近い、が石畳の小道は林泉橋を挟み駐車場までの石段に続く。

やれやれ、ランドは広い。まだ観光バスも訪れない朝のうちに到着、目が潤みはじめた歌子さんも河合さんも抱き合い、8人互いに握手を交わし、会、開設5周年記念の大型山行は感涙を極めて、無事、長かった縦走を終えてしまったのです。開きはじめた休憩所に立ち寄り特産のタンカン（ポンカン×イヨカン？）に冷たいタンカンジュースを食るように、不足した新鮮ビタミンで五臓六腑を落ち着かせた。感激の河合が皆に買ってくれた屋久びわは、まだめずらしくおいしいものだった。

次々と大型観光が十数台も連なってくると、我々8人の為に‘まつばんだ交通’も大型観光バスで現われたではないか。予約の時間で無いため出払っている、大型タクシーの代わりになんと贅沢な貸切バスでしょう。

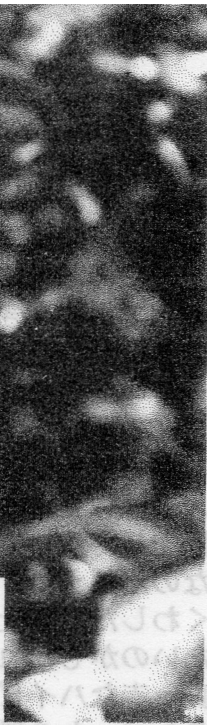
4時台の鹿児島行き飛行機には十分な時間がある。安房のかもめ荘に残して来た荷物を取りに向かい、その後に食事を摂り、温泉、ザックや土産品などの空輸手続きを済ませ、明日の九州・開聞岳は身軽な予定をしてある。安房に戻ったが温泉が利用できなかった。運転手は観光案内もしてくれ、見せ場はゆっくりと走らせながらも飛行機の時間を気遣って、配送本部と連絡を取りつつ尾ノ間（おのあい）温泉まで連れてってくれた。とても親切な島の人々の人間性が窺えた。聞くところによると運転手は神奈川県生まれで、東京に住んだが





(上) 湯床に石  
が敷いてある  
尾之間温泉  
(中) 本富(モツチヨム)  
岳 940m  
(下) ムビスカス  
の花





ブーゲンビリア  
の花  
帰りのヒコキ  
ヒコキが見  
た南庫岳  
と池田湖  
鰻池  
うなぎ





永年勤続表彰で屋久島に来て以来、定年を待たずに今から10年前、ここに移住してしまったと島の魅力を語った。

途中、見所は屋久島の美しい海岸線、広大な海原に浮かぶ種子島の突端にあるロケット打ち上げ場の門倉岬宇宙センターなど。打ち上げの時にはオレンジ色の炎が見られたという。島の頭である大きな宮之浦岳も振返る事ができた。車道には、混んでもいないのに、とろとろ走る車がいた。面白い事にボンネットの助手席側に、運転手を見るように猿がちょこんと座っていたのだ。多分これは無賃乗車でしょう。

バスの運転手が「よくあるんですよ。景色に見惚れてゆっくり走っていると乗られるんですよ。此のあたりに多い屋久猿です。」という。あれでは早く走れまい。写真に収めて追い越し、しばらく走るとまたとろとろ走る車の後に着いた。予想ができた。案の定である。同じ恰好をして乗っていた。どちらの猿も運転手の邪魔にならないように乗せてもらってるつもりなのだろうか。海原を見ながら幾つかのカーブに来ると、親子連れの10ぴき位の団体にでくわした。本土で見る日本猿より少し小さく、きれいな毛色だった。車上の猿はここまで来たいのかも知れない。猿の恩返しは…ないでしょう。屋久猿（厄猿）だから。

真っ赤なハイビスカスやブーゲンビリア、道端の藪にたくさんの花を付けたエンジェルストランペットの群がるのを見る。ハイビスカスはこれから正月までも咲くという。いかにも南国風になってくると、焼酎川・千尋滝入り口・本富岳（もっちょむだけ）を近くに見る尾ノ間（おのあい）温泉に到着だ。80°傾斜を持つ岩登りの本富岳中程にあるこぶは人面相に見える。ここで会長の期待した首おれ鯖は残念ながら無かった。新鮮さと高価に事欠かない故、当地でもなかなか食べれないらしい。

空輸手続きを、まつばんだ交通に依頼し、休憩後の迎えを2時に約束する。

まつばんだ交通の迎えまでたっぷりある時間、山行を振り返り皆の感想一言を書き留めることができた。会長も皆の疲労度を考えると、昨日1時間行程を長くしたのが今日のために最適だったと喜ばれた。山を下りて、慌ただしさがなく本当にリラックスな良い旅ができたと思う。川遊びが良かった。山本は旅の絵手紙は、現地から出さなければ意味が無いと、宛名書きに余念がない。そのいい絵は届いたらいずれ回収をして、何かのおりに披露するようにと期待される。

そして、鹿児島行き空の便に悠々間に合った。JAC. 日本エアコミューター（皆さんはなんと読むか、私はジャコと呼ぶ。国際線に比べ、ちりめんじゃこみたいな可愛いプロペラ機）で30分の空の旅は銀の海原を見下ろし、桜島の噴煙・明日登る開聞岳を眼下に、かくして屋久島と離れてしまった。また来る日があるだろうか。山ガイドとして島に住もうかなど思いを馳せて九州本土に着いてしまった。

今晚の宿、ひらきき荘はNHK中高年登山教室の、岩崎元郎氏と山内賢氏が宿泊した、ひなびた懐かしさを感じる宿で、表には富士山とそっくりな開聞岳を真正面に見る。陽気なおばあさんとしっかりもののおばあさんで賄っていた。陽気なおばあさんは、みよこさんといって食事を出すや、♪花は霧島～たばこは国分～、燃えて上がるは小原 はあ 桜島ハヨイヨイヨイヤサッ♪ いっしょに歌うと、歌を作った事や踊りが好きな事を披露して話が止まない。膳を運んでくるたび鼻歌を披露する。奥で、救急箱を開けた事がないのよ、という85を過ぎてお元気でしっかり者のおばあさんが「ごめんなさいね、みよこさんがちょっとね。」と優しい声で詫びをいれる。コンビネーションのよいお二人の宿でした。